
神様の暇つぶし 神様VS神様

けんしょ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の暇つぶし 神様VS神様

【コード】

N9199Y

【作者名】

けんしよ〜

【あらすじ】

神様は暇をつぶしてしまった所為でまた暇になった。ならまた暇をつぶさないと暇で暇で死んでしまう？

まあ、単純に暇過ぎて飽きてるだけなんだけど。

そんな暇な神様に現代で魂が増えすぎて処理が追い付かないこの話が舞い込んできたわけで……

今回の神様の暇つぶしはどんな方法なのか、てか題名の神様VS神様って何だとか色々疑問だけど勝手に始まります。

この小説は3人称の練習も兼ねているので誤字脱字を指摘しても

らえると作者は非常に喜びます。では、暇つぶしに読んでやってください。

1 魂 注意、除霊ではありません(前書き)

こんにちは、お久しぶり、はじめまして、けんしよ〜です。

またしても妙な小説を書いておりますが、この小説に前作のキャラはちょっとしか登場しません。しかも「お前等かよ」と言いたくなるような奴しか出ません。

前作の最後の後書きを見た人は「作者、Mだったんだな」と思ってください。

では、暇つぶしに本文をどうぞ。

1魂 注意、除霊ではありません

『朝のニュースをお伝えします。昨日未明、佐連村におきまして未知のウィルスが発見されました。これを受け政府からは当村への出入りを制限するとの発表があり、』

テレビの電源が切られソファに座っていた少年が立ち上がる。

「沙夜、そろそろ出ねえと遅刻だぞ」

キッチンの奥に居る少女に声をかけた。

「今行くよー」

キッチンから出てきたのは間延びした喋り方の少し小柄な少女。茶色っぽい髪を肩までの高さで抑えている、わりと可愛らしい部類の少女だった。

「兄さん、今日はバイト？」

「ああ。ちよつと遅くなるかもしれない」

「じゃ私もあそこで食べよー」

兄と呼ばれた少年は黒髪で少し高めの身長だった。

2人は中染市立中染高校1年と1年の兄妹だが、両親は旅行と称して3年ほど家に帰ってきていない。

「あ、私友達待たせてるんだっただ」

「早く行ってやれ。戸締まりはやっとかから」

「うん。じゃ放課後にねー」

そう言って沙夜は玄関を開け待ち合わせ場所に向かった。

「さて、俺も行くかな」

5月の空気を吸いながら戸締りをして少年、上左響夜も学校に向かった。

放課後、響夜のクラスにて、

「響夜、速く行くぞ」

「……何でこんな所に居るんですか、天林さん」

「名字で呼ぶなと言ってるだろう」

「燈華さん」

「よろしい」

登場したのはスラリとした美人と称される体型の女性（結構胸デカイ）。腰まで届く艶のある長い黒髪に教室の男子生徒と女子生徒が目を奪われている。

ちなみに女子生徒の何人かは『お姉様』と呟いた。男子生徒は『女王様』と呟いてる。

「今日はお前がバイトだとマスターから聞いたからな、色々と楽しみにしていたんだ。速く行くぞ」

「……分かりました」

天林燈華 17歳。趣味、響夜弄り。

良い予感はしなかったが敢えて何も言わない響夜だった。教室に居た生徒は燈華に目を奪われていて話の内容までは聞き取れていな

い。聞き取れない程度の声量で話してもいた。

響夜のバイト先は喫茶店『スズラン』である。定年前に妻を亡くしたマスターが定年後に趣味で始めた店だったが、コーヒーとケーキが美味い（地雷もあるよ）と近隣住民や学生の間で評判に成り連日結構な客入りを見せている。

年齢層はバラバラだが意外とお客同士で話せる空気で、60歳のオバチャンと女子高生が話している事も有る。

「マスター、こんちわ」

「おや、響夜君。今日もお願いしますね。燈華君、いらっしやい。カウンターで良いかな？」

「じゃ、俺は着替えてきます」

「一人でテーブル席に着く必要も無いだろうし、カウンターで」

響夜は軽食作り兼ウエイトレスのような仕事をしている。

コーヒーやケーキなどの料理はマスターのオリジナルなので手出しができないのだ。コーヒーメーカーで淹れるだけならできる。

「じゃ、私はコーヒーを。夕食はここで取るつもりなんだが、それまで大丈夫だろうか？」

「平気ですよ。カウンター席のお客さんは少ないですから」

「良かった。お、響夜か」

「どうも」

着替えてくると言ってもブレザーとネクタイを脱ぎ、カッターシャツの上から黒いエプロンを着ただけだ。この喫茶店では従業員の服装もそんなに五月蠅くはない。

「あ、7時くらいに沙夜が来るはずです」

「分かりました。その時間には席を1つ空けておきましょう」

「じゃ、注文取ってきます」

「はい、頼みましたよ」

平和な日常。

変わった両親にちょっと抜けている妹、気に成る先輩に絡まれたり学校やバイトでの友人との馬鹿話。

上左響夜の日常は大体これらで構成されている。そこから何か1つが減っても増えても響夜の日常は変貌してしまう。それが分かっているからこそ、響夜はそれらを大切にしている。

そして、日常に何かが増えるならば排除するか受け入れるのが響夜のスタンスだ。

つまり、

「おっす、オラ神様！お前等に命令があって出てきた！」

いきなり目の前に妙な金髪イケメンが出てきてそんな事を言い出したら間違い無く排除を選ぶ。

「……響夜、その変なのは何だ？」

「俺が知りたいです」

時間は夜の9時。場所は人気の無い閑静な住宅街。

喫茶スズランは8時に閉まるが後片付けなどをしているとこの時間になるのだ。

ちなみに沙夜はドラマを見たいがために既に帰宅。勤務中に散々からかってきた燈華と共に帰宅中、それに出会った。

「まあ真面目な話本気で真つ当な命令があんだよ」

そもそもこの男、宙に浮いている。中世ヨーロッパの絵画に出てくる白いローブのような服を着た頭の痛いイケメンが宙に浮いているのだ。

「燈華さん、体温計持ってませんか？」

「残念だが持っていない。どうせならば私が貸して欲しいくらいだ」

「おいおい、俺を無視かよ。まあ良いか、言うだけ言っておくぜ。」

最近あちこちで未知のウイルスが発見されたとかで立ち入り禁止区域が出来てるだろ？それ結構やばいんだわ。人間の魂が増えすぎて処理しきれねえのが原因な。つーわけで、お前ら魂処理しろ。一応魂見れるようにしてやったから対処できんだろ。そうすりゃ最近の異常現象も抑えられるから。

あ、処理方法はこのブレスレット嵌めて殴れ。それで強制的に魂をあるべき流れに乗せられるから。じゃ、頼んだぞ。無理しなくても他の人間にも頼んであるから見つけたらやつとこっくらいに考えとけ。

「じゃあな、処理屋共」

混乱している2人を他所に言いたい事だけ言って自称神様のイケメンは消えた。後に残ったのは少し幅広のブレスレットが2つ。

「……何だつたんだ？」

「私は知らん。とにかく帰ろう。異常に疲れた」

「そうですね」

2人は帰路についた。

「あ、1つの地域に魂が貯まりすぎると面倒な事になるからな。忠

告はしたぞ」

またしても急に出てきて急に消えた自称神様だった。

翌日の昼休み。屋上前の階段にて、

「ふっ！」

短い呼気を吐きながら空中をフヨフヨ漂っている赤ん坊くらいの半透明の青い塊を殴り消滅させる燈華が居た。左腕には幅広のブレスレットがある。

「本当に見えるようになってる……しかも本当にブレスレット無いと触れないし」

横に居た響夜が別の塊を触ろうとしたが虚しく宙をきった。

「あの金髪の言うことが本当かは知らないが、少なくとも何かが見えるようになり殴れば消えるのは確かだ」

「そうですね。はあく、放置したらどうなるってんだ？」

「試してみるか？」

「却下、良い予感がしません。今もだけど。てかブレスレットだと先生五月蠅そうですね」

「そうだな、どうにかしないとな」

2人揃って溜息、後、昼飯を広げた。響夜は弁当、燈華は購買のパン。響夜の弁当は当番制によりお手製だ。

「……少しくれ」

「先輩が後輩にたからないでください。おかず1つで焼きそばパン1口と交換です」

「交渉成立だな」

2人仲良く弁当とパンを平らげる。

「今日の弁当はお前が作ったのか？」

「そうですよ。今週は俺が当番です」

「明日も交換するものを持ってくるとしよう」

「自分で作るとかないんですか？」

「私より上手い男と手料理の交換などしたら女のプライドはスタスタだ」

「さいですか」

こうして、響夜の日常に魂処理という新しい習慣が増えたのだった。

2魂 もう1人の処理屋

「おゝし、じゃお前らの街の魂密度チエックだ」
「……………」

魂処理を始めて3日、恒例となった昼休みの屋上扉前階段には宙に浮いた金髪イケメンが待っていた。

「いやゝ、この国も制服文化は良いよなつ。他の国じゃ皆私服で統一された色気つてもんがねえ」

(自称神の台詞かよ)

「小僧、聞こえてるぞ。てか心読めるぞ」

(ん？と言うことは態々口に出さなくていいから便利?)

「いやいやいや！何生き物として欠かせない物を破棄しようとしてんだよつ！」

(別に言葉以外に正確に意思が伝わるものがあるならそれでも良いんじゃない?)

「通じるのお前から俺にだけだからな！他の奴には一切通じねえから！」

(使えねえ)

「こんの糞ガキツ！」

「そこまでだ」

これまで事の成り行きを見守っていた燈華が2人を止めた。

「何か報告があったのだろう。速く聞かせてくれ」

「……ちっ、糞ガキにこれ以上構ってられねえか。」

今日はお前らの街の魂の密度を教えに来んだよ。基準値としては30%くらいが適正だと思っつけ。で、この街の魂密度は……50%くらいだな」

何かを考えるように目を閉じてから言われた数値は無視できるものではなかった。だからと言って具体的に何をすれば良いのかは分からない2人だったが。

「この前言ってた出入りが制限された村の魂密度は？」

「へえ、女の方は結構頭回るみてえだな。あそこは……80%だな」

「まだ余裕あると見るべきか、あと30%と見るべきか」

「難しいところですね……その村は50%から80%いくのにどれ位かかったんだ？」

「何だよ、両方とも結構冷静だな。つまんねえー。半年だよ」

街1つが閉鎖されるまでにかかる時間としては何とも言えない時間だった。自分の住んでいる街が閉鎖されると考えると半年は決して長いとは言えない。

「あ、ちなみに閉鎖された理由は未知のウイルスなんかじゃねえぞ」
「だろっな」

「良い予感がしない……」

「何だよ、これも予想してたのかよ、つまんねえな。本当は魂密度

「が高過ぎて魔界化してんだよ」
「魔界化？」

不穏な単語に燈華が反応した。響夜は通りかかった魂を殴って処理した。

「物理現象を無視したことが起きんだよ。」

分かりやすいのだと病院とかに居る脳死状態の奴らとか精神病んでる奴に魂が取り付いて動き回るぜ。まあゾンビみたいに痛覚無いかじゃねえよ。ただ肉体と魂が一致しねえと体はどんどん腐っていくし見た目と中身が一致しねえから周りの人間関係はグチャグチャになるな

ま、どんなことが起こるかはその時次第だな」

「ゾンビみたいなのは殴れば治るのか？」

「くくくっ、治るぜ？魂が出てくるまで殴り続けて、出てきた魂を殴ればな」

愉快そうな金髪という言葉に燈華は溜息、響夜は諦めたように天を仰いだ。

「見つからないようにやらないと警察に突き出されると言うわけか」
「……このブレスレット、腕時計とか身に付けてても不自然じゃないものにできないのか？学校じゃ教師と風紀委員が五月蠅いんだ」
「いいぜ、ちょっと返しな」

2つのブレスレットを受け取り金髪が握り締めるとブレスレットが光り革製の腕時計に変わった。

「ほらよ」

「どつも」

「サンキュー」

「じゃ、言うこと言っただし俺は帰るぜ。頑張つて魂処理しろよ、処理屋共」

そう言つて金髪はフーッと天井を突き抜けて消えた。

「……非常識だな」

「今に始まったことじゃないですよ」

今後の展開を完璧に諦めた2人だった。

放課後、響夜と燈華はビル街を探索していた。せめて魔界化しないように目に付く魂だけでも処理することにしたのだ。自分の住んでいる街が出入り制限されるのはキツイ。ちなみに出入り制限された村は実質的には外部と完全に遮断されているようだ。あらゆる通信手段も切られたらしい。だが最初の数日はネットなどが間に合わず情報が流出。今ではその時に得られた情報が都市伝説のように広まっている。

「居るか？」

「高いところに何匹か」

「あれか。流石に届かないし不審者扱いされるな」

「あ、ベンチに1匹」

「座る振りをして処理するからジュースでも買ってきてくれ」

「了解です」

響夜がベンチ横の自動販売機に向かい、燈華がベンチに座る振りをして魂を掌底で処理した。

「このまま少し休みますか？」
「そうだな、少し歩き疲れた」

学校が終わってから2時間は歩き続けてたので休憩することにした2人だった。

「今日は何体だったか？」

「これで10体です。そろそろ帰りませんか？」

「そうだな、沙夜に怪しまれそうな兄としては気を付けないな」

「ただの妹相手に何を気を付けると？」

「貞操？」

「俺の妹を痴女にしないでください」

燈華のからかうような言葉に疲れたように答える響夜だった。一応言っておくと沙夜は多少ブラコンの気があるがいたって普通の妹だ。兄妹仲も普通だ。

「デートがてら魂処理なんて、見せつけてくれるじゃん」

「……ん？」

「響夜、見ちゃいけません」

「はい」

燈華の母親のような口調に乗っかる響夜だった。

「このアタシを無視とは良い度胸じゃん！」

だが声の主からしたら馬鹿にされたも同然の態度だ。普通に怒る。

「え〜と、君は？」

「ふっ、良くぞ聞いてくれたじゃん！」

「本当は聞きたくないぜ？」

「アタシはユウ！あんた達と同じ魂処理屋じゃん！」

何かバーン！って擬音が聞こえてくる自己紹介をしたのは強気な目をした中学生くらいの女の子。ただしハチマキを巻いてて、少々痛い臭いがする。

「そのユウとやらが何の用かな？」

「ふっふっふっ、良くぞ聞いてくれたじゃん！」

好きなのだろうか？

「アタシ以外にも処理屋が居るって聞いて見に来たじゃん。そしてら男連れてデートがてら魂処理なんて巫山戯た態度でムカついたじゃん！」

馬鹿な子供？

「成程、彼氏の居ない寂しい少女の嫉妬か」

「俺は彼氏じゃなんだけどな」

「五月蠅いじゃん！アタシにはこの街を守るっていう使命があるんだから恋愛にうつつを抜かしてる暇はないじゃん！」

何か子供の喧嘩といった空気が増した。ちなみに響夜は燈華が彼女に成ると考えたら嬉しいような怖いような複雑な気持ちに成った。リア充爆発しろっ！

「ならばどうする？私に処理を止めさせるか？己れ1人でこの街の全ての魂を処理し尽くすか？」

「やってやるじゃん！」

「そうか、では精々頑張ることだ。この街が魔界化しないようにな」
余裕の表情の燈華と嘯み付かんばかりのユウ、女の睨み合いは長くは続かなかった。

「話ついたら俺帰ります」

少しは空気読め主人公。

「そうだな、今日はもう帰るとしよう」

「逃げる気じゃん!？」

「嘯み付くなら魂にしとけよ。同じように魂処理したらその内会
うだろ？」

「ふっ、今日は顔合わせといったところだな」

「そういう事。じゃ、縁があったらまたな」

「……またじゃん」

もう1人の処理屋、ユウとの出会いだった。

3魂 魂人発見

「おっつかつれさーんっ！」

恒例の屋上前階段にて、またしても金髪イケメンの自称神様が居た。

「ウザッ」

「響夜、相手は自称とは言え神様だぞ。せめて態度だけでも敬え」
「お前も大概だぞ」

相変わらず宙に浮いている男は苦い顔をした。ここまでコケにした反応で若干イラついているのかもしれない。

「お前らの活躍でタナトスの仕事も大分捗ってな。魂密度も5%下がったぜ」

「あゝ、結構処理したもんな」

「で、それを教えるためだけに態々来たのか？」

「いんや、お前からこの前別の処理屋に会ったろ？」

言われて2人はユウと名乗った少女を思い出した。言われるまで忘れてたとも言つ。それ以前にこの2人はユウに自己紹介をしていない。

そして魂処理はタナトスという神の仕事のようだ。

「あれは俺以外の奴が処理屋にしたガキなんだよ。だから絶対あいつに負けんな」

「……そこは協力して処理しろとか言うところじゃねえの？」

「だって俺の嫌いな奴の差し金なんだもん」

「その見た目で『だもん』は気持ち悪いぞ。で、それだけか？」
「おっと、本題忘れてたぜ。魂人が出た」

2人の知らない単語だった。

「前に話した魂が入っちゃった植物人間とかの話だよ」

「……魂密度が高くないと成らないんじゃないのかよ？」

「場所は病院だぜ？死人が多いってことは魂密度も必然的に高くなるだよ」

「……病院関係者を処理屋にすれば良いのではないか？」

「あいつ等、話聞きやしねえんだよ」

「そりゃ普通信じねえか」

「しまいにゃ自分の正気を疑っておかしくなっちゃまうんだぜ？やっ
てらんねえっての」

神の愚痴を聞かされる2人の方がやってられねえ気分だった。

「私達はその魂人とやらを処理すれば良いのか？」

「ん？おう。ちよつと動き回ってるけど病院内だしお前等が見たら
人の頭に魂がくっついてるように見えるはずだ。じゃ、頼んだぜ」

そう言つて天井に消えていった。

「……動き回ってる、だと？」

「植物状態の人間が急に動き出したらニュースになりませんか？」

「もしかしたら精神が病んでいる方かもしれないな」

「あゝ、んなことも言つてましたね」

これは面倒になったと溜息で誤魔化す2人だった。あまり効果は
なかったが。

「取り敢えず、ネットで情報集めてみますか？この街に入院設備のある病院なんて一つですし、情報も直ぐに集まると思いますよ」
「なら放課後にPC同好会を尋ねるとしよう。バイトは平気か？」
「次は日曜です。情報が集まったら明日の土曜日にも病院行ってみますか？」
「そうだな、用も無しに何度も病院に行くのは不自然だ。情報が入るのを待とう」

放課後、教室棟の隣に建っている部室棟のPC同好会なる部屋にて、

「失礼するぞ」

燈華が一人で乗り込んでいった。響夜はクラスメイトと帰った。

「燈華様っ！どどどどうしてこんな場所につ！」

「いいい今！お茶の用意をっ！」

「構うな。頼みがあって来ただけだ」

何やら痛い少女達がテンパっていた。何が痛いつて？全員猫耳やらウサ耳のカチューシャをつけているのだ。

「ちょっと調べてもらいたいことがあってな。中染病院で変わったことがないか調べて欲しい」

「あ、最近話題のあの病院ですね」

「ほう、詳しく聞かせてくれないか」

知りたい情報が思った以上に速く手に入りそうだった。

「は、はい！何でも最近、精神を病んで歩けなくなって入院までしてた患者さんが普通に病院内を歩き回ってるんだそうです。ただ表情は虚ろで小さい子なんかは泣いちゃったりするそうですけど。今もっと詳しく調べてみますねっ！」

部屋に居た4人の少女達が一齐に2台のPC画面に食いつき中染病院の情報を集めている。

実は燈華には中染高校内公式ファンクラブがあるのだが、本人は知らない。ちなみに響夜を敵視する交戦派と響夜との仲を応援する支援派が存在している。響夜としては放っておいてほしい話だ。

このPC同好会は全員支援派だ。

10分後、

「ふう〜、粗方調べました」

「そうか。どうだった？」

「顔写真まで載ってたので患者さんの素性も分かりました。

名前は鳥嶋香澄さん23歳独身。3月に精神的に不安定になって入院したみたいです。日常生活もおくれないほどだったみたいです。が、理由までは分かりませんでした。

それが2週間前に急に虚ろな顔で病院内を歩き回るようになったそうです。

私達の調べで分かったのはここまでです」

どこか済まなさそうに同行会会長の少女（燈華と同じクラスなのに敬語）が話してくれた。燈華は画面に映った顔写真を写メしている。

「いや、これだけ調べてもらったら充分過ぎるくらいだ。ありがとう

「う
「はづっ！」

1年生の部員が燈華の微笑を受けて顔を真っ赤にして椅子に倒れ込んだ。

「……私は長居しない方がよさそうだな。では、またな」
「はい！何かあったら気軽に来てください！」

翌日の土曜日、午前10時。中染病院前ベンチにて響夜が昨日の話を聞いていた。

「相変わらず、女子からモテますね」
「そうなのか？まあ良い、行くぞ」

響夜は飾り気のない格好で黒のポロシャツにジーンズ。燈華は裾が足首の少し上くらいまでしかないジーンズに体のラインがバツチり見える半袖シャツだ。ヘソが丸見えのやつだった。
近くを通る男は必ず燈華を1度は見てしまう。

「魂人と思わしきは鳥嶋香澄って人でしたね。はあ、関わりたくなえ」

「同感だが、やるぞ」

2人は病院内の待合室に置いてあるベンチに並んで座った。
中染病院は総合病院で科によって待合場が別にある。2人が居るのは精神科と皮膚科が並んでいる待合場だ。

「見つけたらどうします？人気の無い所に行かないと何もできません

んよ？」

「男が言つと婦女暴行の計画に聞こえるな」

「無理矢理は趣味じゃありません」

「結構Sとして有名だぞ」

「話逸れてますよ」

「そうだったな。私が声をかけて人気の無い場所まで誘導しよう。

その後、速やかに処理する」

「それが妥当ですかね。はあ、良い予感しねえ」

で、待った結果。

「来たようだ」

「以外と速くご対面ですか。これ以上は怪しまれそうだったから丁度良い」

精神科病棟の通路の方から1人の女性が歩いてくる。まるで夢遊病者のように覚束ない足取りだが、その目には力強い光りを宿している。

「響夜は先に人気の無い場所を探せ。私は彼女に接触してみる」

「了解です」

響夜がのんびりと通路の奥を目指し、鳥嶋香澄とすれ違う。横目で確認すると確かに頭部に魂がちよつと変形したような形の青い半透明な物体がくっついていていた。

試しに頭を掻く振りをして手で魂に触れようとしてみたが触れなかった。響夜も燈華も腕時計はつけている。

面倒なことになってきたようだ。

「さて、病院で人気の無い所なんて……屋上くらいしか思いつかな

いよなあ
」

先の見えない不安から、諦めると囁く悪魔の声に身をゆだねる響
夜だった。

4魂 魂人への対処法

病院で人気の無い所が思いつかなかつた響夜は仕方なしに屋上に来てみた。意外なことに鍵はかかつていなかった。

「人は……居ない。ここなら平気か？」

燈華が後ろに居るのは確認済なのでここまでは順調。問題はその後、魂人にどう対抗するかだった。

フェンスの下を見に扉から離れ、2人を待つ。

「響夜、ここで良いんだな？」

「他に思いつきません。ここでやりましょう」

背後で扉の閉まる音がした。振り向いてみると、明らかに正気じゃない焦点は合わないがランランと輝く目をした女性が響夜と燈華の間に居た。

「と言うわけだ、鳥嶋香澄。いや、鳥嶋香澄に憑く何か」

燈華の言葉に鳥嶋香澄の肩がピクリと反応した。

「お前が誰かは知らない。だが鳥嶋香澄本人ではないだろう？その体は鳥嶋香澄の物だ。返してやってくれないか？」

響夜から見える女性の表情はピクピクと痙攣している。怒りで震えているかのようだ。

「生きているお前達に、何が分かる」

鳥嶋香澄が呟いたのは、とても20代の女性の声とは思えない低い声だった。

「分からないだろうな。だからこうして対峙している」

「ハッキリと言いな。その小僧も同じか」

「さっきのやり取りで分かかってんだろ？」

「そうだったな」

自暴自棄になった狂人というわけではないらしいが、テレビや漫画の悪霊と同類で考えている響夜としては話し合いは期待していない。

「そのままだと体が腐るそうさ。早めに体から出て成仏したらどうだ？」

処理と言うと反抗されそうなので成仏と言い換えた燈華だったが素直に従うとは思っていない。

「五月蠅い、お前達の意見など聞いていない。俺には目的がある」

「それこそ聞いていない。お前が占拠しているその体は別人の物だ。さっさと出て行け」

「五月蠅いと言ったぞ、小娘」

鳥嶋香澄が首だけを背後の燈華に向け、濁った瞳で射抜く。壊れたブリキの人形のような、首の関節が砕けているのではないかと思う姿勢だった。

「出て行けと言ったぞ、亡者」

気持ち悪い視線を余裕の表情で受け止める燈華は鳥嶋香澄を見る。
鳥嶋香澄の後ろに居る響夜を見る。

「俺に交渉など無意味だ。来るなら来、」

「言われなくても」

鳥嶋香澄は燈華を見ていたが、燈華は鳥嶋香澄を視界に入れていただけだった。本当に見ていたのは忍び寄る響夜。

燈華とのお喋りに気を取られている鳥嶋香澄を正面から殴り倒し燈華の前に転がす。同時に燈華も蹴り返す。

「まさかあんなにも無警戒に響夜から視線を外すとは思わなかったぞ。交渉は決裂、ここからは実力行使といこう」

「この蛮族がつ！」

「略奪者が何を言う」

「貴様っ！」

「後ろガラ空き！」

燈華の挑発に乗ってしまいまたしても後ろから響夜に攻撃された魂人から魂が剥がれ始めた。

「成程、これを続けければ剥がれるという事か」

「今の俺、かなりの最低野郎に見えるんだろうな」

勝機を見て笑を浮かべる燈華と自分の行いが周りからどう見られるか考えてゲンナリする響夜だった。

2人がそうして鳥嶋香澄と対峙していると、階段扉からバタバタと走る音が聞こえてきた。この状況を誰かに見られるのはマズイと

一瞬焦った響夜だったが扉を開いた人物を見て脱力した。

「出てくるじゃん、魂人！この魂処理屋のユウが相手じゃんっ！」

「何だよ、この前のハチマキ中学生か。飴ちゃんやるから帰れ」

登場したのはハチマキを巻いたもう1人の魂処理屋、ユウだった。

響夜が持っているのは病院のフロントに置いてあった飴だ。

ちなみにユウからしても2人が居るのは想定外だったらしい。

「何でお前等がいるじゃん!？」

「自称神とやらの指示だ」

「アタシだけで充分じゃん！」

「どうでも良いけど速く倒さねえとさっきまでのダメージ回復しちまうぞ」

「響夜、私達は私達でやるぞ。あいつは協力する気はなさそうだ」
「了解です」

「ガキが1人増えた程度で！」

完全に無視された鳥嶋香澄がキレた。その上キャンキャン五月蠅い少女の登場でウンザリもした。

「さっさと処理してやるじゃん！」

ユウが鳥嶋香澄に正面から殴りかかるが覚束無かった足取りは消え、シッカリと地面を踏みしめユウの拳を両手をクロスさせて受け止める。

殴り合いの経験など小学校低学年以来のユウはその後の行動が遅れ、カウンターで強烈な右ローキックが横腹に当たり倒れた。

追撃しようとした鳥嶋香澄だったが響夜がまたしても背後から蹴飛

ばし倒れそうになったところを燈華のアップで追撃された。

「流石響夜だ。不意打ちが上手い」

「遠回しに貶してますよね」

「このガキ共がっ！」

いつまで経っても巫山戯た態度の2人に鳥嶋香澄のイライラも最高潮だ。

何度も背後から不意打ちをしてくる響夜に殴りかかる。寝たきり病人にはありえない速さで近付いてくる鳥嶋香澄に驚きながらも響夜は腹に蹴りを叩き込んだ。

燈華はよく男と喧嘩をし、響夜はそれに巻き込まれる事が多い。結果1対1の喧嘩ならば簡単には負けない程度に強くなった。

「何で寝たきりの病人があんな動けんのだ？」

「恐らくリミッターが働いていないんだろっ」

響夜の独り言に燈華が答えた。俗に言う『人間は本来出せる力の殆どをセーブしている』というやつだ。

「自分の体じゃないから何しても良いってか？盗人猛々しいな」

「黙れっ！」

響夜の小馬鹿にしたような態度に鳥嶋香澄が掴みかかるがバツクステップで避けられ、顎を燈華に蹴り上げられる。その拍子に魂が殆ど離れた。

魂が剥がれかかっているのが見えただけではないが響夜が前にステップし距離を詰め、鳥嶋香澄のおデコに手を当て地面に叩きつけた。

完全に力の抜けた鳥嶋香澄の体からは魂が離れたようで、響夜と

燈華の目の前には人間の形をした魂が現れた。

『何故だっ！何故俺の邪魔をするっ！俺はただ、家族に会いたかっただけだっ！』

初めて聞く魂の叫び声にユウがビクツと震えた。

『ガキ共が何様のつもりだっ！少し特殊な力を持っているからと神気取りかっ！この体は俺が受け取ったものだっ！』

魂には魂の事情がある。生前の未練を捨てきれず、また神に処理してもらいあるべき流れに乗る事も出来なかった魂は現世で願いを叶えるために必死だ。

そのためには人の体に乗っ取る事も辞さないほどに。

「誰が神など気取るものか」

「あんな巫山戯た奴の真似なんて、御免だ」

ただし、ここに居る2人にその手の泣き落しも慟哭も通じない。

「貴様こそ他者の肉体に乗っ取るなど、どういうつもりだ」

燈華の静かだが責めるような視線が人型の魂を貫く。

「他者の自由を奪うなど、貴様こそ神を気取るのも大概にしろ」

ゆっくりと、燈華が魂に近付く。

「鳥嶋香澄に何があったのか、私は知らない」

燈華 1歩進める度に1歩分後ろに下がろうとする魂だが、いつの間にか背後に移動していた響夜に羽交い締めにされた。

「鳥嶋香澄自信が、貴様に体を明け渡したのかもしれない」

羽交い締めになれ逃げられない魂の顔は恐怖に歪んでいる。

「だが、それが貴様の行動の理由にはならない。あるべき流れで猛省しろっ！」

燈華の右ストレートが魂の鳩尾を打ち抜き、消滅させる。

『俺は、ただ……』

最後に聞こえたのは、言葉にならない名もなき魂の悲鳴、ではなく。

「すまん」

「軽く、殴れば、良かったでしょう、が」

魂と一緒に殴られた男の情けない非難めいた声だった。

5魂 平穩とは言い難い日常

「ふっふっふっ、流石俺が見込んだ奴等だっ！あの馬鹿の鼻も明かせて俺は非常に鼻が高い！今なら大概の願いを叶えてやるぞ！」

「では願おう。消えろ」

「ウザイ」

恒例の屋上前階段にて恒例の神様登場。ちなみに週明けの月曜日である。

流石に2人とも突然の登場にも慣れて直ぐに返した。神様は微妙にシヨボーンとしている。

「お前等、いくらなんでも酷くねえか」

「あんな不愉快な思いをさせられたら誰だってこうなる。失せる元凶」

「夢見の悪い経験だった。消えろ似非神」

「ここぞとばかりにボロつかすに言いまくる2人だった。

「……そこまで言うなら帰ってやるよっ！置土産だ、とっとけっ！」

いつも通り天井に消えていった神様だった。

「置土産だって言う奴初めて見た」

「私もだ。結局何の変化も無いようだ、何をしに来たのだろうな」

「知りたくもないです」

「同感だ」

とことん神様が嫌いな2人だった。

「そう言えば、鳥嶋香澄のその後を知りたくはないか？」

「興味ないです」

「そう言うな、私は話したいんだ。ちゃんと聞いている」

最初から響夜の意思など無視する気の燈華だった。

「土曜日と日曜日は流石に倒れたままだったらしい。それはそうだな、あれだけ殴っておいて普通のOLが無事なはずがない。特に何度も背後から首を痛めるような攻撃をされたんだ。首の骨に異常が無いのが不思議なくらいだ」

響夜の顔が微妙に青い。

それもそのはず、背後から何度も攻撃したのは響夜だ。そのたびに鳥嶋香澄は鞭打ちになるような衝撃を受けている。最後には後頭部を屋上の床に叩きつけもした。訴えられたら殺人未遂だと言われる可能性だってある。

「日曜日の昼過ぎくらいに目を覚ましてから首が痛いと言っていたそうだな。心当たりはないか？なあ、響夜」

「……さあ、後ろから殴られてもしたんですかね。いや、世の中何があるか分からないですし怖いですね」

「ふっ、そうだな。いきなり見知らぬ男子高校生に殴られたのかもしれないな」

燈華のあからさま過ぎる言葉に冷汗が噴き出す響夜であった。理由はどうあれ女性を背後から襲ったのは事実である。

「苛めるのはこの辺にしておいてやろう。

目を覚ました鳥嶋香澄は憑き物が落ちたとまではいかないまでも

社会復帰に前向きにリハビリを始めたそうだ。今は病院のリハビリステーションで落ちた体力を鍛え直し、精神科で内面のバランス調整をしているそうだ」

「ま、急に回復するなんて都合の良い事はありませんか。まあ、社会復帰に動き出せるようになった時点で驚きだな」

「そうだな。今日はバイトか？」

「ええ、沙夜も来ますよ」

「ふっ、では放課後を楽しみにしているぞ」

そう言っただけで名残惜しさなど欠片も感じさせずに燈華がその場を後にした。

「……今回は特別だった」

響夜にとって魂処理は新しく増えた日常の1面だ。だが新しいという事は無くなる可能性も高いという事だ。

「こんな事はもう起きない、起きてても知らない。それだけだ」

そう自分に言い聞かせ、響夜もその場を後にした。

放課後、予定通り響夜は喫茶スズランでバイトに精を出していた。普段通りにマスターに挨拶し、馴染みの客を雑談混じりに接客し、時々暇潰しで来ている燈華と妹の沙夜に絡まれる。そんな響夜の日常。

響夜が外を見ると店の扉を開けよとしている人が居る事に気付く。接客の準備にトレーの上にお冷を用意する。その間に新たな客が店内に足を踏み入れた。

「いらつしゃいませ、御一人様ですか？」

新たな客は強気な目をした中学生くらいの少女だった。頭には八チマキを巻いていて少々痛い臭いがする。

「……あんだ、何でここに居るじゃん」

少女、ユウが顔を驚愕に染めて聞いてきた。

「何でと言われても、ここは俺のバイト先だ。2人席とカウンター、どっちが良い？」

「……カウンター」

今にも噛み付いてきそうな雰囲気だったが店内は響夜のホーム。下手に絡んで痛い目を見るのは御免だとばかりに響夜を抜いて壁際のカウンター席、燈華の隣に座った。

「ほう、珍しい客が来たものだな。マスター、この子にオレンジジュースを。私の奢りだ」

「ここはバーじゃありませんよ」

「アタシは子供じゃないじゃんっ！」

マスターのツツコミは華麗にスルーされた。マスターも最初から冗談だと分かっているので微笑を浮かべて2人の様子を窺っている。もとい楽しんでる。

「それより何であんたまでここに居るじゃん」

「私はここの常連だ」

「……あいつが居る時点で気付くべきだったじゃん」

「心外だな、私はただマスターのコーヒーとケーキに釣られただけ」

だ。響夜と知り合ったのは偶々だ」

燈華のハッキリとした物言いに二の句も繋げずに黙りこくってしまふユウだった。

「燈華さん、あんまり新規のお客さんに絡まないでください。ユウ、注文が決まったら呼んでくれ」

「……分かったじゃん」

お冷とメニューを渋々と受け取るユウだった。

「ナニナニー！兄さんと義理姉さんの知り合いー？」

燈華の反対隣に座っていた沙夜が興味津々で燈華越しにユウを見る。どうにも沙夜の『姉さん』に別の意味を感じて不安になる響夜だった。

「わー、可愛い娘！」

どちらかと言えばユウは生意気そうな娘だ。妹を眼科に連れていこうか悩む兄であった。

「……決まったじゃん」

「お、決まったか。ご注文は？」

「レモンティにチーズケーキ」

「……っ！」

店内に衝撃が走った。響夜も燈華も沙夜も他も客も全員目を見開いてユウを見る。ユウとしてはコーヒーは苦くて飲めない、しかしジュースは恥ずかしいという背伸びしたい年頃の注文だった。

「な、何かマズイじゃん？」

「う、嘘だろう？」

「……質の悪い冗談だよな？」

「何で、よりにもよって」

上から燈華、響夜、沙夜の順である。ちなみにマスターは嬉しそうに紅茶の準備を始めた。それを見て全員がユウに同情的な視線を向けた。響夜に至っては死地に赴く戦友を見るような暖かくも悲しい目をしている。

「その、何だ、お前とは衝突してばっかだったけど、嫌いじゃなかったぜ」

「私達はきつと今世では仲良くはなれないだろうが、来世では友人になれると良いな」

「駄目だよ、思い直して！どうして、どうしてそんな風に命を軽々しく扱えるのっ！」

響夜と燈華の優しい顔、アニメの最終回で相打ち覚悟の主人公を止めようとするヒロインのような沙夜に困惑し過ぎて何がなんだか分からなくなるユウだった。ちなみに誰一人自己紹介していない。

「さ、できましたよ」

マスターの言葉に過剰に反応した3人を見てユウもいよいよ自分が何をしたのか悟った。

マスターがカウンター越しに出してきたのはレモンティとチーズケーキ。

そう、チーズケーキは良い。作りおきにも関わらず鮮度の高い状態で保存されていた事が1目で分かる綺麗な色、鼻腔をくすぐる芳

醇な香りは口に含んだら間違はなく至福の時を与えてくれるだろうと予想できる。

問題はレモンティの方だ。明らかにおかしい。レモンティなのに、青い。

鼻腔を刺激するのは何やら柑橘系とは別の酸味の臭い。強いて言うならキムチに近いが通常のそれより明らかにキツイ臭いだ。正直チーズケーキの香りをかき消しかかっている。

「……………店員、響夜とか言っただじゃん？」

「ああ」

「店員ならお客様のためのサービス精神ってのがあるじゃん？」

「無い」

「今直ぐ作るじゃん。そしてアタシの代わりにレモンティだけ飲むじゃん」

「無理」

喫茶スズラン、そこは人知れず現世に溢れかえった魂を神に代わり処理する者達、通称、魂処理屋が集まる秘密の喫茶店。

今日もスズランには魂処理屋が集まる。混沌と呪いのような現実
に愁いを抱きながら。

「響夜、私はこれで帰るよ。明日提出の課題があるんだ」

「私も！明日の英語の予習しなくちゃっ！」

「あ、用事思い出したじゃん！大丈夫じゃん、金は払うじゃん！」

逃げ惑う人々、阿鼻叫喚の地獄がそこにはあった。

「待て！自分の注文した品くらい自分でどうにかしろっ！」

悪夢のような現実も、呪いたくなるような人間関係も含めて、響

夜の日常は続いていく。
響夜は心の内で呟く。

(何でこうなった)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9199y/>

神様の暇つぶし 神様VS神様

2011年12月11日02時57分発行